
泣き虫勇者と職業：農民

マ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣き虫勇者と職業：農民

【Nコード】

N8110T

【作者名】

マ

【あらすじ】

勇者と農民が魔王を倒しに行くお話。とりあえず頭とケツと基本的な設定だけ決まっていますが、必要なものは随時考える方向で。

泣き虫、農民に出会う

リサは泣いていた。にじんだ視界いっぱい広がった口腔から生えた乱杭歯が怖かった。断続的に吐き出される、生臭い息が気持ちわるかった。アゴの端から垂れるヨダレが、リサの長く黒い髪を汚すのが悲しかった。

バーサクフルフ
狂狼に伸しかかられ、岩場の地面に押しつけられた背中が、にぶく痛む。小さな体で必死に抵抗し、狂狼の顎あぎとに差し入れた剣を持ち上げようとしては、無力を自覚させられる。

リサの大きな瞳からは次々に涙があふれて、頬をつたっていく。涙が堪えようとしても止まらない。痛くても、辛くても、苦しくても、それだけならば泣かずに済んだかも知れない。

何より悔しいからだ。

弄ばれているのだ。伸しかかるソイツの背後には、たむろする狂狼の群れがあざ笑うかのようにリサ達をながめている。

あきらめれば守れない。彼女の後には、満身創痍の仲間がいる。僧侶のソーニヤの顔は真っ青で、目を虚ろにさせて、杖にすがり、うずくまっている。戦士のファトマは鎧のいたるところを貫かれて血を流し、地に倒れ伏している。わずかに聞こえる浅い息だけが、二人の命がまだあることを告げていた。

もはや戦う力があるうはずもない。状況はどう考えても最悪で、救いがなくて、こんなところで死ぬのかと、使命を果たせず死ぬのかと、ただ、ただ悔しかった。

イヤだ！ 胸うちの中から浮かび上がるただ一語だけを支えで、彼女は抗おうとする。

だがそんな思いも虚しく、腕には力が入らなくなっていく、押し込まれ、狂狼の顎が彼女の白く細い首を食い破ろうと、ゆっくりと近づいてくる。

耐えきれず目をつぶる。

狂狼の鼻先を首筋にうずめられ、粘性を帯びたヨダレに濡れた舌が、喉をなであげる。

全身が怖気立つ。イヤだ！

首元で剣が碎ける音。皮膚に！ 牙が！

体を固くし、首筋に迫る痛みに身構えていたが、彼女の皮膚が貫かれる瞬間はついにこなかった。代わりに訪れたのは、むしろ牙が離れていく感触だった。

狂狼の体が震えたかと思うと、リサを抑えつける力はなくなり、狂狼の体の重みだけが残った。

目を開けると、青い空に白い雲がゆっくりと流れていく。

何事だろうか……リサは呆然としながら後退ると、狂狼の体が地面に沈んで音を立てた。

見やれば狂狼の体には棒が一本生えていた。だれだか昔に会った貴族が自慢していた、昆虫標本に似ている。そんな感慨が思い浮かんだ。

ピンの代わりにしている木の棒は、狂狼の体を地面にしつかりと縫いとめている。先端は完全に埋まり、よほど力を込めなければ抜くのは難しそうだ。地面に突き立つ位置が、組み敷かれていた時の股ぐらのちょうど真下であり、わずかでもずれていれば、下腹を貫かれて狂狼と仲良く標本になっていた。

愉快の想像とはとても言えないが、現実味が不思議と感じられず、すこしばかり微笑が口の端に浮かびそうな、そんな心地になった。混乱しているのかもしれない。

「オイ」

そんなリサの心中をよそに、呼びかける声があった。

首を回して右を見た。呼びかけに応えたわけではない。ただ音に反応しただけだった。

いつの間に近づいていたのか、目の前に男が立っていた。ずいぶ

んと大きい 170cm以上はある 堂々とした体躯の男だった。粗末な出来の灰色のズボンと緑の麻シャツで、薄い生地だから、その体が充分以上の筋肉がついていることが見て取れた。

頑健な足腰に、分厚い胸板、太い首元。視線をあげていくと、力強いアゴをした輪郭が見えたが、逆光を遮って顔立ちはわからない。ただ年のころは、自分より少し上くらいだ、そうリサは直感した。

「手は？」

問いかけられる。低くて深い、しゃがれた声。つられて男の手元をみると、見たこともない長柄の武器を持っていた。総身が鉄で、柄が男の身長ほどで刃渡りは50cmに満たない 槍に似ているが、先端の刃は傾いでいて、浅い湾曲を描いている。不思議なのは湾曲の外側ではなく内側が刃になっていることだ。農民が草を刈るのに使う大鎌と槍を混ぜた、そんな武器だった。

そこまで観察して、男の問いかけに頓狂なことをしたと気づく。問いかけはパーティーを組んでいないことを気にかけたものだった。そこでやっと、自分たちの命が危うい状況にあったことを思い出す。狂狼の群れに視線をやると、警戒してこちらを睨みつけていた。

「お、お願い お願いします」

慌てて返事すると、満足したかのように男は鷹揚に頷いて、肩にかけていた雑嚢をリサの足元に投げてよこした。

「適当につかえばいい、金はあとでもらう」

言い終わるが早い、男はかけ出した。手元に残った雑嚢の口が開いていた。中には食糧や薬草や量は少ないが魔法薬の類が入っていた。

そつだ、仲間には与えないと。リサは思い、雑嚢に手をいれて中身を漁る。そこではたと思いとどまる。男がかけ出したのは、狂狼の群れの方だ。リサと仲間たちでは狂狼一頭にさえ太刀打ちできなかった、男がどれほど強かろうと群れが相手では。そんな思いに駆られて視線をあげる。

首が飛んでいた。男が無造作に振るった一撃に、首のなくなった

狂狼三頭が倒れる。回りこもうとした一頭は、腹を蹴られて跳ねて転がった。飛び掛った一頭は顔面を殴りつけられ跳ね返され、脳漿を宙にまいてから地面に叩きつけられる。

もう一度男が武器を振るう。無作為な一撃に一頭が上半身と下半身を二つに分けられ、一頭はなんとか飛びすさって直撃は避けたが、刃先に腹を掠められ、内蔵を大気に晒した。

男が身動きをする度に、狂狼の群れは頭数を減らしていく。雑草を刈るようだ、戦いにそんな言葉フレーズをリサは思い浮かべた。心配など無意味、リサは仲間たちを手当することにした。

泣き虫、農民に出会う（後書き）

ここまでで確定。農民（主人公）の名前は次回までに考える。なるべく芋っぽいのを。次回は「農民、勇者に出会う」です。

農民、勇者に出会う

「オイ」

バルカは少女に声をかけた。小柄な少女だ。立ち上がったもバルカの肩ほどの背丈しかない。

長い黒髪を揺らして少女が振り向く。バルカに気づいて視線をあげてくると、やがて目があった。状況の変化にほうけているのだろう。ハシバミ色の瞳には意志が感じられず、大きなガラス玉が眼窩に嵌めこまれているようだった。目の周りを泣きはらしていなければ可愛らしい小造な顔立ちで、数年もすれば美女と呼ばれるだろう。だが、そう呼ぶにはまだ幼い。お人形さんのような、そんな感想をバルカは得た。眉の上で切り揃えられた髪や、土や狂狼のヨダレや埃に汚れているが白い肌は、その印象を深めている。

苦労をしたこともなさそうな外見と上等な上着にひざ丈の裾が広がったスカートは、貴族の令嬢を思わせる。その服の上に革鎧を身につけて、右手に折れた剣を握り締めているのだから違和感がひどい。まるで冒険にでてみたくて過保護な家を出奔した少女のようである。

内心で舌打ちをして、呆けた少女に何を言おうか考える。正気に戻るのを待つよりも、適当に指示を出したほうが早そうだった。何も言わず狂狼を狩るかとも考えたが、少女が剣を握っている以上、それなりの職業であることは間違いない。パーティーは全滅しかけ立ち上がるのもやつの様子だから可能性は低いが、助けたつもりが経験値を横取りと言われてはたまらない。

「手は？」

パーサクウルフ

視線で狂狼の群れをけん制しながら答えを待つ。予想よりも早く答えは帰ってきた。

狂狼の仕掛けと返事のどちらが早いかを考えていたくらいである、答えに頷いてから少女に雑嚢を投げてよこす。

「適当に使えばいい、金はあとでもらう」

足に力をこめて大地を蹴る。一足で10m、狂狼の群れへと身を躍らせる。驚いた狂狼が四散しようとするが、逃がさない。正面の
一頭に大鎌サイズを振るう。自身の力には追いつけていなが、長い間相棒
としている鋼のサイズだ。狙い過たず、狂狼の体を縦に割る。

囲まれるのは嫌だから、そのまま正面を抜けると振り返る。三頭
が同時に飛び掛ってくるのが目に映る。サイズを振る。三頭の首が
飛ぶ。

小賢しい一頭が回りこもうとするのに苛立ち、腹を蹴ってやる。
それを囫に仕掛けてくる一頭を殴り殺す。

人間が魔族に襲われているのをみるのは、いつであっても腹立た
しい。

報いを受けさせてやる。報復　甘美な響きだ。口の端が持ち上
がるのを、バルカは感じた。

雑魚を狩るのは、草を刈るよりも簡単だ。草を刈るには技術と力
がいるが、魔物を狩るには攻撃力があればいいのだ。

最後の一頭に大鎌を突き刺す。大鎌の形状が、槍に近いからでき
る芸当だ。バルカの鋼のサイズは鍛冶屋に特注して作ったもので、
鎌と認識されるギリギリまで、刃の角度を調整した。

引きぬき最後の一頭が絶命すると戦闘も終わった。狂狼の肉体は
空気に溶けるように消え、服に染み付いた返り血が綺麗に消えてい
く。残されたのは鎌の穂先に現れたお金とアイテムだ。バルカは大
鎌を置くと、戦利品を回収する。

獣の牙	*	2
獣の皮	*	1
獣の肉	*	5
薬草	*	1

アイテムと銀貨1枚と銅貨38枚を手に入れた！

視界に表示されたメッセージボックスを一瞥して閉じると、巾着袋に貨幣をしまう。倒した狂狼の数は28、妥当か少し多いかくらい金額だ。アイテムをしまおうとするが、雑囊がないのに気づいた。しかたなしに拾い上げ、少女のもとへ向かうことにする。

振り返れば少女たちが手をふってから駆け寄ってきた。雑囊に入れておいたアイテムを使ったのだろう、三人とも元氣そうな姿である。すこしばかり安堵と微笑まじさに、戦闘の余韻が抜けていく。

三人の少女が目の前までくると、頭をさげて口々に感謝の意を登らせた。

最初に礼を告げたのは青い髪の杖を持った少女だ。丁寧な美しいとも思えるお辞儀をする様から、よつぼどの教育を受けているのだろう。さきほど最後までがんばっていた少女は、礼を言うやいなや青髪の少女の白い貫頭衣の裾をつかんで、隠れるようにしてバルカをうかがう。困った様子の青髪の少女をよそに、最後の一人、獣人の少女が楽しげな口調で礼を言った。

「礼には及ばない。それよりも分け前だけど、使ったアイテムの代金にしている？」

少し雑な口調。彼女たちとの力の差と、少し年下に見える年齢のせいで敬語を忘れていたことに気づいて恥ずかしさを覚える。

「そんな！ 私たちが使ったアイテムとでは釣合いません！」

声を上げたのは、青い髪の少女だ。黒髪の少女よりやや年上に見える、可愛いというよりも美しいという顔立ちだ。白い貫頭衣の上からでもわかる、メリハリのある柔らかそうな体つきだった。

彼女の言うとおり、彼女たちが得られただろう金額では、使ったアイテムの対価として払いきれものではない。

「それに命まで助けていただいて」

「横殴りしたのは変わらない。君の言葉は間違っていないかもしれ
ないが、トラブルを避けるための線引きだから」

言葉を続けようとする少女を遮ってバルカは告げた。不承不承と

いった態ではあるが少女も納得したようだった。

また雑な口を聞いてしまった、バツの悪さを感じたが、敬語にするのもいまさらかと考えて、バル力は続ける。

「それにしても、なんでこんなところまで？ レベルも低いようだけれど」

身の丈に合わない、言外に滲ませて問う。少女たちは顔を見合わせるから、やはりリーダーなのだろう青い髪の少女が答える。

「あの……私たちには少しわけがありました……」

「なあ、その前に自己紹介をしない　ですか？」

穴だらけのプレートメイルを身につけた獣人の少女が遮った。明るく跳ねるような声に無理にとってつけたような敬語、活発な気性がうかがえる。猫のそれと同じ耳が赤い髪の間隙から伸びていて、腰から生えた尻尾と一緒に時折ピクピクと震える。

「それもそうだ。オレは　」

「私ファトマ！　獣人のファトマ！　職業は戦士！　ねねね、お兄さん珍しい武器持つてるね。なんて武器？　職業は？　出身は？」

人に見えるけど本当に人なの？　半竜半人ドラゴンハーフだったりしない？」

底抜けに明るく楽しそうな声で、矢継ぎ早の質問にバル力があるけにとられた。それに気づいたのだろうファトマが少し沈黙してから「……ですか？」つけ加えた。

「ファトマ、バカ」

青髪の少女の後ろに隠れた黒髪の少女がつぶやいた。

「いや、敬語じゃなくても　」

「な、なにおう！　泣き虫リサ！　こそこそ隠れていないででてこい！」

「泣いてなんかない！　ファトマの鳥頭！」

そう言うとりサと呼ばれた少女が逃げ出し、ファトマと追いかけてこを始めてしまった。再三言葉を遮られ、疲れを覚えたバル力は無意識に眉間に手をやっていた。

「ほんとうに申しわけありません。二人にはよく言って聞かせます

から」

心底こころ苦しいと言った風情で青髪の少女がいった。

「私はソーニヤと申します、それである子がリサ」
わたくし

言いながら黒い髪の少女をみやると「リサ！ ファトマ！ じゃああっていないでこちらに来なさい！」二人を呼びつけた。

取っ組み合いをしていた二人の少女が、状況を思い出したのだろう、恥ずかしげにバルカ達のもとへ戻ってきた。二人ともしおれた様子で、三人の力関係がよくわかるヒトコマだ。特にファトマなど耳と尻尾までしおれているのだからわかりやすい。

わかつていますね、そう言いたげな視線を受けて、リサが「ごめんなさい」とバルカに謝った。それを見て気づいたファトマが慌てて「ゴメン なさい」追従するが、やはりとってつけたような敬語である。

「ああ、敬語じゃなくていい」

バルカの言葉を受けて、喜び耳と尻尾を立てるファトマであるが、またソーニヤに一睨みされてすぐしおれた。上がったり下がったり忙しい耳と尻尾だ、バルカは思った。

「それで……お名前をいただいても？」

促されてバルカがやっと自己紹介を始めた。

「名前はバルカという。年は19。出身はイロリア山脈の向こうにあるファアリアンという王国だ。俺が国をでたときには魔族にだいぶやられていたが、滅んだという話は聞かないから、まだあるだろう」

「ファアリアン！ そんな遠くから。その……なにかわけでも？」

ソーニヤがファアリアンの名前を知っているのにバルカは少し驚いたが、彼女のお辞儀や言葉遣いを思い返せば不思議はない。やはり教育を受けた人間なのだ。

「食えなくなつた、それが訳といえば訳になるかな」

答えていると答えているが、茶を濁した答え方だった。（もつとも気づいたのはソーニヤだけであつたが）

「ねえねえ、珍しい武器使っているよね？ なんの職業？」

横入りしたファトマの間に、バルカは意表をつかれた。直裁的に聞いてくるとは思っていなかった。

「そう珍しい職業じゃない。なんなら握手でもするかい？」

口を滑らした、バルカは思う。

「いいよー、あくしゅ、あくしゅー」

無邪気にファトマが手を差し出す。

「ファトマー！」

ソーニヤが慌てて遮る。相手の素性も知れないのに、情報を与えるのはつたない。ソーニヤがそう考えたのは明白だ。

「な……なんだよう」蚊の鳴くような声でファトマがうめく。

しばし緊張が場に満ちる。その緊張を打ち破ったのは、ソーニヤだった。

「バルカさん、私は握手をしても構いません」

ソーニヤは言った。それは考えあつてのことだったのだが、ソーニヤの背中でリサが身を固くするのがわかった。

「リサ、大丈夫よ」小さく声をかける。それで少しは安心できたのか、貫頭衣の裾をつかむ力が弱くなった。

「……オイオイ、オレ達はさつき会ったばかりでお互いの素性も知れないのに？」

わざとらしくおどけて、バルカが答えた。

「アラ、握手を求めてきたのはバルカさんではなくて？」

しまった、これはよくない。ソーニヤが思った瞬間に、場の緊張が深まる。これは貴族同士の腹の探り合いではないのだ。相手に伝わらない程度に深く呼吸して気分を切り替える。

「いえ、失礼しました。私たちはどうしても生きて帰りたいのです。それは私たちの持つある事情に関わるのですが……それは握手をし

ていただければわかることかと思いません。そして私たちだけでは王都にたどりつくことは難しいでしょう。だれか保護してくれる方が必要です」

ゆっくりと、丁寧に、まるで自分が聖女であり一切の邪心をもたない、そう聞こえるように言葉をつないでいく。いつでも事情をかくし、自分が優位であるかのように振舞うのは得ではない。警戒されないように、時には弱点となるような事情もばらしてしまうのは、市井で生きて行くのには重要だ。

「それで、その保護をオレに頼みたいと？」

ほら、少しかだけ警戒がゆるめられた。

「はい。情けないことも、命を助けていただいたのにも関わらず、厚かましいことも承知しております」

さきほど命を助けられたことを、わざと出す。ソーニヤ達はバルカに害を与えられる人間ではないと主張し、その裏で助けた命にわずかでも責任感でも覚えさせられればと、口にする。

恥ずかしげもなく、と言われればそうなのかもしれない。だがリサには、ソーニヤには使命がある。使命を果たせられる可能性が少しでもあがるなら、誇りなど、恥など、犬にでもくわせてやればいいのだ。女であることすら利用すればいい。自分たちの命は、こんなところで捨ててよいものでは、決してない。

一歩近寄り、バルカの手首をつかまえる。わずかに力がこもるのを感じたが、胸元へひきあげる。少しばかりアゴを持ち上げて、上目遣いでバルカにねだる。

「お願いします」

あわれっぽく聞こえるように、睦言でも囁くようにいう。バルカの顔に逡巡がまじり始めたのを見て取れば、視線に力を込めて一押しする。

「わかった。とりあえず事情とやらを聞こう。握手はそれを聞いてからだ」

全身に安堵が満ちて、力が抜けるのがわかった。

「ありがとうございます」

演技など一切ふくまない、心からの笑顔で感謝する。その言葉と表情にこそ、バルカは顔に血がのぼるのを感じていたのだが、ソーニヤをふくめ、リサもファトマも気づくことはなかった。

「まだ君たちを王都に連れて行くと決めたわけじゃない。まずは話からだ」

照れ隠しにわざと乱暴な口調でバルカが返すのだが、それでも満足とソーニヤは笑顔を浮かべてから話し始める。

「はい。私たちは王からある使命を与えられて、王都をでました。最初の目的は王都の西方にあるイラハという村の偵察です。私たち3名に加えて、9名の騎士で旅立ちました。イラハの村までは、私たち3人でいくには難しいですが、9名の騎士たちは精鋭ではないとはいえ、それなりのレベルをもつ方達です。彼らにひっぱってもらい、私たちのレベルもあげながらいく演習に近いものだったんです。実際イラハの村につくのは容易でした。私たちが襲われたのは、偵察を終えた帰り道、夜営の最中、空が白み始めたところです。普段であれば、真珠の森の近くに住む狂狼の群れです。奇襲でしたから、騎士たちもろくに対応できず……私たちが起きだすころには騎士たちの数は半分になっていました。一人の騎士が護衛になってくれて、他の騎士たちは私たちを逃がすための囿になって、私たちは必死で逃げましたが、やがて追いつかれ、護衛になった騎士がまた犠牲になって……ついに逃げ切れなくなった私たちはここで戦うことになりましたが、私の魔力が尽き、ソーニヤが倒れ……そこからはバルカさんもよくご存知かと思えます」

その話を聞いて、バルカは血の下がる思いがした。真珠の森と言えば、10日ほど前から彼が狩りをしていたところだ。真珠の森に生息する魔族程度であれば、さして知能が高いわけではない。彼が狩りに勤しめば、身の危険を感じ森から逃げ出すだろう。そして普段得ている食べ物がなければ、獣に毛が生えた程度の知能しかない魔族であれば、同属意識よりも本能を優先する。そして連鎖的に狂

狼どもも逃げ出し、獲物をみつける。自分の狩りが、間接的とはいえ9人の騎士の命をうばったことは想像に難くなかった。

「そうか。それを辛かったな」

吐き出すような思いだったが、バルカは努めて平静にいった。9人の騎士たちの命を自分がうばったとは決して言えなかった。それはバルカの卑怯さ故でもあったし、言ったとしても目の前の三人に不信を抱かせるだけで、事態が好転するわけでもなかったからだ。

だからバルカは決めた。なにがあっても3人を王都に送りとどけ、それから事実を伝えようと。バルカにとっては罪ほろぼしのつもりもあつたが、それが罪悪感から逃れたいだけだという自覚もあつた。だが偽善と知って行動から逃げ出すのもバカげている、そう考えての決意だった。つばを飲み込んでから決意を告げる。

「わかった。君たちを王都まで送りとどけよう」

その返答に一番喜んだのは、ソーニヤだった。ありがとうございます、ありがとうございます。そう口にして頭を深くさげた。それは貴族的な美しさは感じられなかったが、強い気持ちを感じさせるものだった。その姿に、リサとファトマが続く。

「礼はよしてくれ。オレの都合もあるんだ」

3人が礼をいうのを止めてから、バルカは続けた。

「それよりも握手だ。一時的とはいえ君たちとはパーティを組むつもりだ。オレとのレベル差はだいぶあるだろうから、ここらの魔族であれば問題なく君たちをひっぱていける」

「ハイ」「うん」「……」

三人三色の言葉を返す。もつともリサは頷いただけだが。

「ああ、オレの職業は珍しくはないが変わっている。すこし困惑するかもしれないが、驚かないでくれよ」

「いたずらっぽく微笑んでバルカがいった。」

「めずしくないのに変わってる？ むずかしいよ、バルカ。ヒントちょうだい」

別にクイズを出したわけでもないのに、ファトマがヒントをせが

異常だ。普通、農民といえば、どんなに真面目に働いたとしても10前後でその生涯を終える。そもそも彼ら、彼女らはレベルを必要としない生活を過ごす。

どんな人生を送ってきたのか。目の前のバルカという男の異常さに、畏怖を覚える。たった19年という歳月で、どれだけ苛烈な環境に身を置き続けたのか、バルカの持つ【狂戦士】^{バイサーカー}がそれを裏付ける。天恵としての【狂戦士】^{バイサーカー}は単身で複数の敵に挑み、瀕死になりながらも勝利を得ることを数回繰り返すことで手に入る。苦勞の割に効果は小さく、戦神の加護を1段階ひきあげると、パーティの数より多い敵と対峙したときに攻撃力に補正がつくだけだ。だれも狙ってまで取得しようとはしない天恵である。【英雄志願】^{マソレスム}という天恵は聞いたことがないが、名前だけでも取得の困難さがうかがえる。

畏怖の目を向けるソーニヤに、諦めた笑みをバルカが返した。

「う、ごめんなさい」

動揺しながらもソーニヤは謝罪する。それは感情はこもっていたが、どこか人を遠ざける、卑屈さを感じさせる謝罪だった。

「普通の反応だ。気にしないでいい」

いつものことだと、バルカが答える。間の悪い沈黙。

「次はアタシの番だ！」

そんな二人の間に流れた空気を一切感じず、ファトマが名乗りをあげて手を伸ばす。

ソーニヤの手からバルカの手が離れ、交差した視線が切れる。二人の間になにか壁のようなもの降りるのをソーニヤは感じた。だがこれはソーニヤが悪い。この失点はいつか、自身のためにも、そして目の前の恩人のためにも取り返そう、ソーニヤは考えて気分を切り替える。

バルカがファトマの手を握ると、ファトマがまたぞろ騒ぎ出す。

「な、なんと！ 【戦神の加護】を後天で持っている人とか初めて見たよ！ それにレベル56？ レベル56まであげても基礎パラ

メーターってここまでしか上がらないの？ うわぁ、ヤル気なくしそー。それより、バルカ！ あんたのステって見てるだけで面白いよー！」

マジウケるんですケドーと言わんばかりでまくし立てるファトマである。

「いや、オレの場合は職業柄、基礎パラメータが上がりにくいんだ。同じ職業だったら素養は高いほうだろうが、限度はある。ファトマみたいに素養が高い、先天スキルもジャラジャラつけてる戦士なら、もっと高くなるだろうさ」

バルカは気分が腐りかけるのを感じたが、励ましの言葉を口にす
る。

「ほっほー、私の努力は報われるワケだね！」

元気いっぱい、悪気皆無のファトマである。心に傷を追いかけるバルカであるが【自失耐性】と【英雄志願】が無駄に発動し、ファトマの言葉を頭から追いやった。

「それと最後になったけどリサ、よろしく」

手を差し出すバルカに、リサは一瞬身を竦ませるが、おずおずと手を差し出し返す。頬をすこし赤く染めて、期待と不安と喜びが入り交じった様子に、リサと付き合いの長いソーニヤは違和感を覚えた。

人見知りの激しいリサが、そんな表情をするのが不思議だった。

ソーニヤと出会ったときでさえ、握手をするにはイヤイヤというのが見透かせる態度だった。ましてや異性のバルカに対してだ、普段であれば泣くほど嫌がっていても不思議ではない。

そんなソーニヤの思いをよそに、二人の手が結ばれて

空気が一変した。リサが泣き出す。声を立てることさえできず、ポロポロと涙をこぼす。ファトマが全身の毛を逆立てる。尻尾も耳も緊張に張り詰めている。ソーニヤはリサを庇おうと思ったが、身動きのできない自分に気づく。

こんなものがあるのかと、ソーニヤは未知の感覚に震えた。先程

まで穏やかな雰囲気だったバルカの体から放たれる威圧は、ソーニヤの全身を支配していた。指先ひとつさえ動かすことが許されない。ただその場に居合わせただけのソーニヤでさえ、そうなのだ。直接感情を向けられているリサならば　なんとかバルカから視線を逸らしてリサを見れば、かわいそうなほどに顔を蒼白にさせて、涙を流す目からは次第に力が失われていく。

このままではリサが壊れてしまう！　なんとかしなくては！　考えようとすることも思考が散逸して定まらない。

なぜ、なぜ彼はこんなにも怒っているのか……。

その理由はバルカの口から告げられた。

「ふざけるっ！　オマエが、オマエが　勇者だと!？」

農民、勇者に出会う（後書き）

バルカ 吠えないか？

長すぎました。分割するか、まとめるか。どうにかしたほうがよさそうです。

さてプロローグが終わって、やっとやりたい事が始められました。この小説は借景と換骨奪胎を目的としていますので、ステロタイプが大事なのです。これでオチまで分かる人にはわかる感じに。

プロローグ時点でのバルカの天恵ですが、増やす予定です。ひどい目にあったら貰えそうなのを適当に。あとあと「そんなん持ってたけ？」ってのが出てくるでしょうが、プロット上必要なのは追加しないはず。

さて次は設定メモでも書くつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8110t/>

泣き虫勇者と職業：農民

2011年6月6日01時02分発行